

ヨコハマ市民まち普請事業の状況報告及び今後の方向性の意見交換について

1 趣旨

平成17年度にヨコハマ市民まち普請事業（以下「まち普請事業」という。）を開始してから18年が経過し、これまでに56施設が整備されてきました。整備後の経年や社会情勢の変化などを受け、整備した施設の維持管理や、整備提案内容の偏重などの課題も生じています。

そこで、これまでのまち普請事業の状況を踏まえ、今後の方向性、5年後や10年後、さらにその先の将来を見据えたまち普請事業のあり方等について、横浜市地域まちづくり推進委員会の委員のみなさまのご意見をお聞かせいただき、今後のまち普請事業の運営の参考とさせていただきます。

2 これまでの実績

(1) 応募件数、選考件数等の実績

- ・平成17年度から令和4年度までの18年間に213件の応募があり、うち63件を選考、平均倍率は約3倍
- ・応募件数は平成21～23年度、平成25～27年度に連続して10件を下回ったが、概ね年10件程度で推移
- ・整備内容を大きく6分類しているが、「休憩・交流拠点」が応募・選考とも全体の半数近くを占める

選考件数と応募件数の状況

	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	合計
選考件数	7	5	5	4	5	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	0	63
応募件数	31	22	10	11	9	9	7	10	6	7	9	14	12	14	12	11	8	11	213

整備場所・整備内容・整備テーマ（応募全数）

整備場所・整備内容・整備テーマ（2次選考提案のみ）

整備場所			整備内容（メイン）						整備テーマ（メイン）					整備場所			整備内容（メイン）						整備テーマ（メイン）				
公 有 地	民 有 地	公 民 複 合	植 樹 ・ 花 壇 伐 採	水 環 境 の 整 備	広 場 ・ 遊 び 場	み ち 空 間 整 備	休 憩 ・ 交 流 施 設	設 備	歴 史 ・ 文 化	自 然	防 災 ・ 防 犯	美 化 ・ 環 境 改 善	地 域 交 流	公 有 地	民 有 地	公 民 複 合	植 樹 ・ 花 壇 伐 採	水 環 境 の 整 備	広 場 ・ 遊 び 場	み ち 空 間 整 備	休 憩 ・ 交 流 施 設	設 備	歴 史 ・ 文 化	自 然	防 災 ・ 防 犯	美 化 ・ 環 境 改 善	地 域 交 流
91	103	14	12	11	25	21	108	31	17	28	20	49	94	23	30	7	4	8	4	6	36	2	4	9	5	11	31

(2) 石川賞（平成26年度 日本都市計画学会）

- ・都市計画に関する独創的・啓発的な業績により、都市計画の進歩・発展に貢献した個人・団体を表彰
- ・テーマ不問、ハード面だけでなくソフト面も含めた事業プログラムや審査過程を評価
- ・住民自らが施設整備を行うことによるコストパフォーマンス性、地域愛の醸成などの効果にも言及
- ・今後の新たな公共事業のあり方を示唆する独創的・画期的事業

(3) 事業評価（「市民が生み出す地域の力」研究会）（卯月教授ほか審査経験者等で平成29年まとめ）

- ・整備施設でアンケートやヒアリング結果を分析し、まち普請事業の「5つの価値」をまとめた

- 5つの価値**：①小さな公共施設建設としてのコストパフォーマンス性が高い
 ②市民が地域課題を解決するための拠点になっている
 ③市民のフレキシブルな雇用機会を開発している
 ④市民同士のつながり（ソーシャルキャピタル）を醸成している
 ⑤職員に高い研修効果がある

3 近年のまち普請事業に対する認識とあり方検討の視点

(1) 事務局（市）の認識とあり方検討の視点

現状認識	あり方検討の視点
整備提案内容の偏重 ・平成28年度以降は約7割が地域の居場所づくりを目的とする「休憩・交流施設」の提案 ・住民発意の多様な地域課題解決等の提案を募集しているが近年はその多様性が失われつつある	少子高齢化や共働き世帯、空き家の増加などの社会情勢の変化を敏感に捉え、多世代交流や空き家活用を取り入れた「地域住民の先見性」の結果ともいえる ➡空き家等を活用した「休憩・交流施設」など、課題とその解決手法が確立されつつある普遍的な地域課題に対する施策を行政が随時展開していくことも必要
整備施設の維持管理・活動の継続 ・施設の維持管理負担の増加、中心メンバーの高齢化などから廃止された施設も散見	約1年にわたる選考過程、整備施設の運営管理責任など、事業のハードルが高い印象もある。整備後の運営方法が確立されてきた「休憩・交流拠点」の提案が増えているとも考えられる ➡まちづくりへの参画のハードルを下げ、地域住民の新たな発想、手法が行かされる事業への転換も必要
不選考団体へのフォロー ・1次コンテストで選考されるも2次コンテストで選考されない「不選考提案団体」が必ず発生 ・選考過程を通じて醸成されたまちづくりの思いや住民同士のつながりが、不選考を機に終息してしまう可能性がある	審査においては、施設の整備時や運営時における地域住民の参画の仕掛けなども評価し、施設そのものへの愛着はもちろん、地域への愛着が醸成されることを期待した事業 ➡若年層の地域住民の参画をより促進し、整備後の施設の維持管理や活動継続の担い手不足の解消につなげることも必要 施設整備後や不選考の団体の状況把握が十分にできていない ➡運営継続や担い手確保の実例、ニーズを収集し支援策を検討

(2) まち普請事業部会委員（審査員）で出された主な意見

ア 事業の美点について

- ・実は伴走支援が非常に大きくて、一緒に作っていく過程をサポートして、いろいろな人材を結び付けて、区の支援制度と一緒に学びながら着地させていくところがすごく大事。そのあたりをもっとアピールしたほうがいい。お金だけと見えてしまうのはもったいない。
- ・リノベーションスクールやファンド系まちづくりなど、世の中の拠点整備の支援事業を比較したとき、重要な要素が全部入っているというのがまち普請。事業計画をしっかりと考えるプロセスを必死に背中を押し、「覚悟ある事業プレイヤー」を育てる「伴走支援」を是非誇ってもらいたい。

イ 事務局の課題認識について

- ・拠点に絞った支援・制度というのもありえると思うし、市民活動を活発化させたい、拠点に特化したい、といった行政施策と連携した集中的な募集があつていい。地域の内発性とか住民のアイデアを大事にしつつ、まち普請事業と行政の施策とをどこまで関連させるかのバランスも考えてみてはどうか。
- ・拠点が aumentando ということについて、それはそれで世の中の流れとしてとらえていて、また別のニーズが出てくれば他になるかもしれない。まち普請の仕組みは拠点整備にフィットしているのかも。
- ・拠点多いことは悪いことではない。ニーズがある背景はこの20年弱で日本中にストック活用の参考となるロールモデルがたくさん増えてきたこともある。ほかのテーマの提案が出てくるようにするにはロールモデルとなり得る先事例を示すなど、見せ方を意識してもいい。
- ・一部の交流施設の管理運営支援はサービスBなどが出来てきたことで標準化されつつあるが、総合的に交流施設の管理運営を支援していくことも行政全体として検討してもいい。